

使われなくなった
のこぎり屋根工場
今後を語る座談会

第二回

報告書

のこぎり座

座談会内容

- 一、のこぎり屋根工場内部掃除
- 二、日本全国ノコヤネコウバショー
講師：吉田敬子
- 三、今後の活動議論

日時、平成二十八年十二月二十三日
午前九時～午後四時

場所、平松毛織株式会社工場
一宮市竈屋四丁目十一番十三号

第一回のご座では、のこぎり屋根工場活用事例を紹介し、みなさんの工場への想いを語っていただきました。第二回のご座は、桐生市の活動「お掃除探検プロジェクト」をお手本に、実際に皆さんで空き工場を掃除しました。

「お掃除探検プロジェクト」は、掃除をすることによって所有者の気持ちに変化をもたらしたり、工場と市民との出会いのきっかけになったりと、工場活用の大きな動力となっています。また自分の手で触り、綺麗にしていくことで、その場の特徴や個性、これまでの記憶とも向き合うことができます。のこぎり屋根工場のこれからを考える上で、欠くことのできないものを教えてください。今回掃除する工場は、平松毛織の向かい側にある福島さんの工場です。

福島さんは元々三条毛織の番頭さんで、昭和 32 年に独立され今の工場を建てられました。始めは一連の工場でしたが、昭和 48 年に増築し、今では二連の工場になっています。閉業は平成 15 年。屋根はセメント瓦葺き、外壁は波とたん、内壁は漆喰仕上げ、床はコンクリート土間です。当初は外部だった下屋部分は現在は内部空間として使われており、その部分の床は土です。内部空間の広さは約 40 坪。特徴的なのは、真ん中の鉄柱と鉄骨トラス梁で、増築の際につけられたものです。当時この工場では背の高いジャガード織機が 5 台置かれており、そのため一部梁が切られて鉄材で補強されています。





掃除を始める前の状況は、福島さんの御苦勞によってある程度片付いていましたが、まだまだ細かい整理もされていなく、至る所に埃がたまっていました。掃除をする前の状況を皆さんで各々自由な視点で撮影してもらいました。どこが汚なくて、どこが気になって、どこを掃除したいのか、撮影を通して感じてもらい、掃除への意欲を掻き立てるウォーミングアップとして行いました。

まずは不要品を分別しながら外へ出します。今回は向かい側の平松毛織の駐車場へゴミを運びましたが、場所がない場合、一気に進めるのはなかなか困難だと感じました。予想以上のゴミの量でした。

次に整理整頓班と埃除去班に別れて作業しました。工場内にある棚をきれいにし、煩雑に置かれていた工具類を棚にまとめました。ロフトの上に溜まったガラクタも全て撤去しました。今回の掃除のために青木さんにつくっていただいた極長箒で梁の上の埃を落としました。雑巾のように固まった埃がどんどん落ちてきました。何回やっても落ちてきました。窓枠に溜まった埃も落としました。

そして床掃除です。繊維の屑と土と油が混ざり固まっており、なかなか床から剥がれませんでした。埃との戦いはきりがありませんので、昼食をはさんで午後1時30分ぐらいで掃除を切り上げました。ゴミの中からは当時工場で使われていた貴重なものもあり、それらはのこぎり二で保管します。





その後のこぎり二のカフェで、これまで3000棟以上のこぎり屋根工場を撮影されてきた建築写真家吉田敬子さんによる日本全国ノコヤネコウバショウを行いました。ほんの一部でしたが、全国それぞれ特色のあるのこぎり屋根工場を見せていただきました。講演されている吉田さんの温度がどんどん上がっていくにつれ、皆さんも吉田さんの話、そしてのこぎり屋根に引き込まれていったように思います。

面白い小見出しとともに、ノコヤネコウバショウは進められました。

群馬県桐生市周辺「鋸屋根の建築美」

群馬県桐生市周辺「鋸屋根のあるまち：風景」

愛知県蒲郡市「磯の香とブリキのハーモニー」

愛知県知多半島 / 武豊線・東浦周辺「黒塗りガンギリ」

山梨県富士吉田市「ワインレッドの鋸屋根」

山梨県都留市「ディテールの美：木造鋸屋根」

埼玉県秩父市「奥秩父の隠れのこぎり屋根」

富山县城端町 / 福井県・福武線 水落駅周辺「北陸小さな旅」

石川県小松市「背高のっぼ」

イギリスの鋸屋根「保存と活用」

岡山県井原市にあるのはなんとも上品な工場です。このオーナーさんは工場維持の為、屋根にソーラーパネルを取り付けるそうですが、もし活用したいという方が見つかった場合は、丁寧に取り外した瓦をまた葺き直すという素晴らしい心意気の方です。

また吉田さんが一宮のある工場に訪れ撮影されたとき、オーナーさんが、工場は息子の迷惑になるから取り壊すとおっしゃり、吉田さんはその言葉に違和感を感じたそうです。後日吉田さんから送られてきた想いの詰まった写真を見たオーナーさんは、そこに何かを感じたのでしょうか。工場を取り壊すことを考え直し、工場を使って喫茶店を開こうという方向に変わったそうです。吉田さんが全国をまわり行っていらっしゃることは、吉田さんの想いや写真を通してオーナーの気持ちまでも変えてしまう力を持っているのだと深く感じました。

「たかが工場、されど工場」

吉田さんが常におっしゃっている言葉です。なんだこんなもの、と思うものほど、愛らしく感じてしまう。それは全ての工場の持ち主の心にも共通してあるものだと思います。先月他界したぼくの祖父も、実はこうゆう気持ちだったのかなと、工場に素っ気なかった祖父の言葉を思い出していました。本物の場所、本物の空気。吉田さんが伝え残していきたいものがしっかりと見えました。

一宮に関しては、「これだけ町のあちこちにのこぎり屋根がある地域は他にない」と、声を大にしておっしゃられていました。それを聞く一宮市民の皆さんはどのように感じ取られたのでしょうか。





その後皆さんにご意見ご感想をいただきました。皆さんそれぞれ一宮やのこぎり工場に対する考え方を持っていらっしやいました。その中で何度か出てきた言葉。

「保存と活用」

言うのは簡単ですが、工場を管理するオーナーからすれば余計な口出しになりかねません。実際に保存・活用するためにはどうすればいいのか、答えは一つではないし、見つけるのは困難です。オーナーの気持ち、立地、建物の状態等、様々な要素が絡み合います。例え方法がまだ見つかっていなくても、とにかく掃除をしてみよう、まずは触れてみよう、という方が多かったように思います。掃除に参加された他の工場のオーナーさんから、うちの工場の掃除も手伝って欲しいという声もありました。

輪が繋がった瞬間もありました。吉田さんのお知り合いで日本女子大学家政学部住居学科教授のは澤紀子さん。名古屋工業大学の教授だった当時、学生と共に一宮市起にある旧湊屋文右衛門邸の修復や、のこぎり屋根工場の研究をされていたそうです。その教授を知っているという名古屋工業大学の学生が今回のこ座に参加されていました。彼は建築・まちづくりに関する研究をしているそうですが、は澤さんの活動のことは知らなかったそうです。すぐに教授に話を聞いてみると言ってくれました。保存と活用の活動に、大学という大きく活発な組織が加わることは、非常に大きな追い風になります。

今回親子で参加された尾関さんは、奥町にのこぎり屋根工場を所有されており、のこ座終了後早速現場に伺いました。とてもきれいな工場は現在ご家族の倉庫として、また服飾デザインの学生である息子さんのアトリエとして使われています。その夜ご家族で今後の工場の利用ついて話をされたそうです。既に次世代のために活用されている素敵な工場だと感じました。

まだ20代である彼らが今後ののこ座の活動に欠かせないキーマンになっていくでしょう。

第三回のこ座は、今座談会の最後に議論が始まりかけた、ガチャマン当時を知る人による実体験をお聞きしたいと考えております。のこぎり屋根工場を実際に支えてきた方々と対峙せずして、本当に価値のあるのこぎり屋根工場を残していくことはできません。当時の工場の細かい様子、働き方、社会情勢なども含め、本物の人から、本物の話を伺える機会を設けられたらと思います。

お掃除に参加いただきました皆様、一日ご苦労様でした。そして遠くからのこ座のために足を運んでくださいました吉田敬子さんに深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

平松毛織株式会社取締役 平松久典

